

科学の大衆性

科学階級性の一つの実質に関する分析

戸坂 潤

—

大衆性という言葉は政治に属する言葉である、如何にして大衆を獲得するか、如何にして大衆を指導するか、等々という政治的な関心の下で初めて、大衆性という概念は考察の日程に上る理由を有つ、とそう人々は考える。確かにそうである。之に反して、科学に属するものは就中真理という言葉である、それによって大衆を獲得・指導し得ようが得まいが、そのようなことと関係なく、科学はひたすらに真理を追求すべきである。とそう人々は又考えるであろう。確かにその通りである。だがそれにも拘らず吾々は、恰も選りに選んで、科学の大衆性を問題としようとする。何故なら、第一に、この問題は、提出され得ない問題でもなく解き得ない問題でもないからである。何故政治が科学的であり得ないか、又何故科学が政治的であつてはならないのか。併しこの問題は、決して単に可能な問題であるというに止まらず、実は之こそ吾々にとつて、必然的な問題なのである。何故か。この問題を多少とも解決するならば、恐らく科学そのものの概念が或る一つの根本的な批判・変革を受けざるを得ないであろう、科学の概念へのこの批判・この変革は併し現在の科学の存在条件から云つて絶対に必要であり、そして現在に於ける程この必然性が逼迫したことは恐らく未だ曾て無かつたであろう、からである。歴史の現段階に於て、歴史の運動の動力を担い、そしてそれを担っていることを自覚し得るものこそ、大衆ではないか。このような大衆という存在が

従つてその概念が 併し正に、現代の産物であることは忘れられてはならない。古来様々な大衆はあつたであろう、だが吾々にとつて必然的な問題となり得るような大衆は、現代に至つて初めて現われた、と云うのである。之は一つの眼前の事実である。かかる事実が何故生じたか、それに答え得るものは、歴史的唯物論の外にはありそうにも思えない。吾々は説明を之に一任しよう。

(1) 政治がどのようにして科学的であり得るかは、例えば K. Mannheim, Ideologie und Utopie に明らかである。又科学が政治的に在り得る理由に就いては、「論理の政治的性格」を見よ。

科学の大衆性という問題は、大衆が現代に於て持つ歴史的使命を条件とする時、初めて必然的な問題となる。そうでないならば、この問題は、哲学の空想的な一例題、としての価値しか有たなかつたかも知れない。

人々は、大衆乃至大衆性、文芸其の他の を口にすることを好む。併しこの概念自身が可なり曖昧であるようである。そして多くの場合そうあるように、曖昧な概念が一つの合言葉として通用している内、夫は至極安価な戯画的な使い道を見出す。曾ては文化の概念に就いて、文化生活、文化住宅の類がそうであつた。同様にして今や、大衆文芸・大衆作家の類を産むに至つたのを吾々は見る。大衆とは何等か、甘やかされた俗衆か、思い上つた愚衆でもあるかのように見える。恐らく人々はかかる大衆に対しては、多少とも調子を下げて対応しなければならぬようである。

処がそれならば何故、このように調子を下げて対応せられるにしか値しない大衆が、現にそれ程問題とならねばならないのか。もし大衆が、無価値なものでしかないならば、それを問題とするに値しないだろうからして、問題となるからには之は積極的な価値を有つ筈であろう。人々のかかる大衆の概念はそれ故実は、大衆を語る処の、自らを大衆から区別する処の、非大衆、反大衆 の側に於ける大衆概念なのであり、そして而もそこには直ちに

この概念の一つの根本的な矛盾が暴露されているのである。大衆に対するこの非大衆は、その意識の伝統の必然性によつてはかの大衆を低く評価しながら、外部的な圧迫に強制されては、之を高く評価せねばならぬ喜ばしからぬ義務を意識しているからである。所詮この大衆概念は、大衆が自らを意識するための概念ではなくして、却つて非大衆が自らを夫から区別して意識しようがための概念であるだろう。之は非大衆的な大衆概念に過ぎない。大衆の大衆的概念　大衆的理解　は之に反して、必然的な問題となるに価するだけの積極的な価値の所有者でなければならぬ。そこでは大衆とは、単にその或る一面に於てのみではなくして凡ゆる点に於て優越な一つの勢力を云い表わす言葉である。否そついう勢力を云い表わすためにこそ、この言葉が現在選ばれているのである。

大衆は併し他方、非大衆（反大衆）に對立する処の一つの集団を意味する。従つて今云つたことから、大衆は非大衆を優越する処の集団を意味しなければならぬ。大衆という言葉が現代に至つて初めて重大さを持つて来たその言葉の意味に於ける大衆はそんなのである。

(1) 大衆は併し群衆とか公衆とかいふ集団では無論ない(群衆と公衆との區別に就いてはタルドの《L'opinion et la foule》を見よ)。蓋し大衆とは政治的概念であつて、このような社会学的概念には屬さない。　社会学的には、主として、歴史的・実践的・従つて又政治的・原理　単に歴史的事実ではない　の排除を意味する。

大衆は政治的概念だと言つた。そこで政治の技術に関する一つ概念として人々は多数の概念を有つてであろう。実際、大衆は多衆の概念に引き合わされるのを常とする。

單純に少数なるものは到底大衆ではあり得ないように見える。その限り、大衆は或る意味に於ける多衆でなければならぬようである。多衆とは無論一つの量的規定ではあるが、之は併し實際は、比較上の多少・程度、の差を云い表わすものではなくして、ただその大量性が、そのものの質を固有に決定する時にのみ、初めて多衆は所謂多衆となることが出来る。単に多数であるのではなくして、多数であるが故に特に一定の性質を有たされた限りの多

数こそ、多衆の多衆たる所以を示すことが出来る。かくて多衆は常に、一つの質的規定にまで既に転化しているのが事実である。そこで人々は多衆のこの質を、性質を、如何に性格づけるか。だが茲に必要なことは、多衆は元来様々の構成員の資格其他によつて異なる様々の多衆でありつるに拘らず、今は専ら、そのような種々相から抽象された・抽象的な多衆・多衆としての多衆、を思い浮べねばならぬ、ということである。何故なら、多衆という概念は特に、種々相の下に於ける多衆から抽象的な多衆を抽象し出す企図の下に、行使の動機を有たされるのが事実なのであるから。でそのような多衆概念それ自身に固有な性格として（種々相の下に於ける多衆、の有つ性格とは別である）、量に基く圧倒性と質に基く平均性とを挙げることが出来るであらう。多衆はその圧倒性の故に、政治的に云つて、有力なる勢力を意味することが出来、それ故にこそ或る範圍に於ける政治的事物決定の原理となることが出来るのである（多数決の原理）。と共に又他方に於て、多衆はその平均性の故に、他の意味に於て政治上、低劣なる価値の主体を意味することが出来るであらう。多衆のもつ平均性はそれが優越的でなければこそ平均性であつた、そこでは人間はそれ自身に固有な・真の姿を示す代りに、自己を失い、世俗的環境に渡されて見える。もはやその時、之は政治的事物決定の原理であつてはならないと考えられる。何故なら平均性は、それが一つの原理となる時、例えばハイデッガーの *Alltäglichkeit* となる時^①、ただ低劣性を云い表わす原理でしかあり得ないから。それにも拘らず、この平均性に何等か優越なる・積極的なものが連想されるならば、それは実は前の圧倒性に外ならない、平均性に於て残るものは今はまだ凡庸さだけである。

(一) *Alltäglichkeit* 日常性の概念を、吾々はハイデッガーの個人主義的観点から救い出さねばならないであらう。日常性は一つの歴史的、政治的、原理にまで把握し直されねばならぬ（「日常闘争」などの概念を見よ）。

多衆は一方に於て圧倒性の、他方に於て平均性の・性格を有つ。多衆は一方に於て強力であり他方に於て低質である。多衆は強力にして低質なる勢力、云わばデモン・悪鬼の類でももあるようである。多衆としての多衆、単な

る・抽象的なる多衆、多衆一般、何等の条件をも有たない多衆、例えばそれが有産者の多衆であろうが無産者の多衆であろうがそのような二次以下の条件を特に超越した限りの多衆自体、このような民主主義的多衆概念は、恰も今指摘した強力と低質とを、その二重性として、矛盾として、持っている。かかる民主主義的矛盾はみずからを、民主主義と貴族主義との、相對主義的・シーソー的対立として反映するのがその報いであるであろう。今もこのような多衆概念を以て大衆の概念に代えるならば、その時の大衆概念は恰も、最初に述べた処の非大衆的、大衆概念であつたであろう。彼処に於て見られた大衆概念に於ける矛盾は、とりも直さず茲で見られる多衆概念に於ける矛盾　圧倒性と低質性　であつたのである。それ故、大衆は単なる多衆ではあり得ないことが今や明らかとなつた。

民主主義的なこの多衆概念の自己矛盾は、ただ、圧倒性の止揚の方向、又は低質性の止揚の方向、の何れか、を通じてのみ止揚されることが出来る筈である。多衆が有つた圧倒性が否定されるのは、そして、ただ多衆が積極的に無組織化される時に限るであろう。多衆はこの時鳥合の衆となり、之によつて多衆の低質性は其の強度を大きくされる。単なる多衆の概念へ、即ち単に多衆という類概念へ、無組織という条件が与えられる時、即ち無組織化という種差が付加される時、この概念体は拡張され、その結果としてその概念の今茲に問題になつてゐる限りの性格は反対物に転化する。かくて多衆概念の自己矛盾はたしかに解消する。だが之は同時に多衆概念自身の解消を現実的には意味している。何故なら、このようにその自己矛盾を解消された多衆概念は、もはや現実的に吾々の問題となることが出来る資格を有つていない、吾々の問題は衆であつた、吾々は圧倒性を持つ多衆をこそ問題とすべき歴史的現実的動機を持ち、特に圧倒性の反対物としての多衆を問題とする歴史的動機を現在有たなかつた、から。それであるから多衆概念の矛盾の、この方向　圧倒性の止揚を通じての　に於ける止揚は、多衆概念の形式論的・可能論的・カズイステイック的分析の上で可能であり、それは併し現実的には、多衆概念自身の止

揚に外ならないのである。概念の形式的救済が夫の現実的破滅を意味する処の、かかる現実的弁証法は、實際多くの形式主義的理論家が逆用する常套手段であるであらう。彼等は事物 例^{たと}えば国家・階級等々の形式的定義から出発し、そうすることによって実際には、その事物の性格を否定することに成功するであらう。今が丁度それである。

大衆を語るに際して吾々の問題となつた限りの多衆概念は、それ故、それが有つ低質性（平均性）の止揚の方向に於てのみ、その矛盾を止揚され得る。この概念の現実的動機、この概念が今使用され・取り出され・問題にされる歴史的條件、から云つて、そうなければならぬ、と云うのである。

多衆の圧倒性はただ多衆の非組織化によつてのみ止揚された、そしてただ夫のみがその低質性を強度ならしめた。そこで今度は、この低質性を止揚するためには、多衆の組織化が必要で又充分な筈である。多衆が組織化される、

初めは無意識的に、次いで意識的に、その時の多衆はもはやかの民主主義的な単なる多衆ではない。それは取りも直さず、組織化された、又は組織化されるものとしての、多衆となつたが故に。多衆が組織化される時、その圧倒性は反対物に転化するどころではなく、却つて顕揚されることは云つまでもない。統制と計画とを持つた圧倒性が茲^{こゝ}から出現する。この統制と計画とを導き入れることによつて、圧倒的に随伴した多衆の低質性こそは、反対物へ転化せしめられるであらう。と云うのは、茲^{こゝ}で平均性 低質性はその語尾変化であつた は、もはや単なる平均性ではない、何故なら、平均性は平均性に違いないがそれは切り下げられたる平均ではなくして、却つて引き上げられた水準をこそ意味して来るのだから。多衆は組織化されればされる程その水準を高める、その圧倒性が高められる所以である。かくて組織化されるものとしての多衆に於て、初めて、多数概念のかの民主主義的矛盾は、實質的に 前の場合のように形式論的ではなく 止揚されることが出来る。だがこのようにしてその自己矛盾を解消された多衆概念は、それ自身もはや以前の 単なる、多衆を意味することは出来ない。多衆は組織化

される、多の範疇は組織化される、この時もはや多の範疇は充分ではない、多衆の名称は性格的でなくなる。何故なら組織されたものが少数であっても、それはなお多衆の組織であり得るのだから。多衆は従つて今や、大衆とならねばならぬ。

このようなものが大衆の、大衆的な概念である。民主主義的多数の概念を之が如何に止揚したかを、吾々は今見た。

大衆のこのような概念　組織化されたる又は組織化されるべき多衆　はまだ、併しながら至極一般的な規定をしか持たない。この概念を必要な程度に分析的に完備するためには、更に決定すべき積分多数がなお残されている。組織化こそ夫である。この多数を決定するためには併しながら、吾々は、歴史社会的　政治的　条件を借りる外はあるまい（大衆とは政治的なるものであつた　初めを見よ）。今大衆をばこの点まで決定するならば（そして之が最後の決定とはならないまでも）、大衆とは就中、一つの階級を事実上意味して来ないわけには行かない。何故なら多衆とは少数に対する処の、又大衆とは非大衆に対する処の、対立物であつたが、そうすれば組織化多衆　大衆　なるものが、例えば一つの学派・社交界・聴衆等々を意味する理由も無ければ、そうかと云つて又、国民・国家・民族等々を意味することも喰い違つたことであろう、から。大衆とは　この集団とは　階級の一つである、このことは單純に一個の事實に過ぎない。それ故、多衆を大衆にまで組織化すとは、之を一つの階級にまで組織することの外ではない、組織化とは階級化である。

そこで人々は民衆の概念を思い起こす必要がある、民衆こそ大衆に最も近い概念である。民衆は然るに、常に被支配者を意味する政治的概念であるだろう、支配は政治の根本性格である。それは単に法制的にはなくして又物質的に、政治支配を受けるものの集団を、被支配階級を、云い表わす言葉ではないか。そこで大衆は又、この被支

配階級の名である（大衆に對立するかの非大衆が何であるかは、おのずから明らかであるだろう）。だがこう云つてもまだ之は大衆の一、心、の概念にしか過ぎない。大衆の性格は、かの圧倒性と高度の水準は、何処へ行つたか。茲まで来てもまだ吾々は、大衆概念をただ一般的に語つて来たに過ぎない。というのは、大衆の概念は、歴史の任意の・あらゆる・段階に、通時間的に通じるような、そういう一般的条件の下にのみ、取り扱われて来た。今や、歴史の夫々の現段階　歴史に固有なこの原理　という特殊な条件の下で、而も今の現段階のものとして、夫は最後の決定を受けねばならぬ。かくして大衆が現段階に於て持つ処の、歴史的・政治的・使命が、大衆概念の最後の規定として決定されるであろう。今之を決定したとしよう、さてその使命の遂行に必要な物質的基礎こそ、大衆の量の上の圧倒性に外ならず、この使命の意識的自覚こそ、大衆の質の上的高き水準に外ならない。であるから、大衆の大衆的概念　夫がこの二つの性格を持っていた　はただ歴史的現段階の条件の下でのみ成立する。人々はこの点に注目すべきである。實際、もしこの条件を入れないならば、大衆のかの民主主義的矛盾、圧倒性と低質性との矛盾　は止揚され得なかつたであろう。大衆の概念が、今、吾々にとつて、抑々問題になり得た所以は全く茲にあつた。

さて大衆のこのような性格を一言で云い表わす言葉が、大衆性である。

大衆は単に組織化されたる又は組織化されるものとしての多衆であるばかりでなく、又たえず自らを組織する処のものである。大衆はただ組織性によつてのみ大衆であり得たが、組織はただ組織するという現実的過程に於てのみ組織であることが出来る。そうでなければそれは一つの静止した体系でしかないであろう。大衆はただ自らをたえず組織することによつてのみ大衆であることが出来る。それ故にこそ却つて、未組織大衆という言葉の意味も理解され得る理由を有つてであろう。大衆のこの不断の組織性を特に代表している概念は、そして、前衛である。前衛

とは単なる前衛ではなくして、正にただ大衆を組織する過程の上での前衛であり、そして大衆を組織するものは前衛を措いて外にはない。それ故前衛は自らを大衆から区別するに拘らず、両者は又恰も大衆の名に於て結び付いている。この 実践的な 弁証法に於て、前衛は具体的に 実践的に 大衆性を有つのである。前衛の持つ大衆性は、前衛自らが直接に、従つて抽象的に、多数であることに存するのでもなく、又自らは少数でありながら多衆を觀想的に、従つて又抽象的に、代表している、選挙法的に ことに存するのでもなくして、正に、実践的に・従つて具体的に・大衆階級を組織して行く過程の内にこそ存する。かくて人々は見るべきである、大衆性の概念は、もはや単なる かの抽象的な 多衆性の概念ではなくして、恰もこの多衆性概念を止揚する組織する 処のものであることを。大衆性とはそれ故、大衆が 非大衆がではない 大衆自らを高度にし強力にする処の、大衆のこの組織性でなければならぬ。大衆が有ち得るかの圧倒性と高度の水準とは専らこの性質によつて保証される。大衆性とは何物でもない、ただ大衆の組織性である。或る事実が大衆性を持つとは、それが大衆を何等かの意味で組織する力を有つことである。

大衆化とはであるから、大衆の組織化によつて大衆の高度と強度とを大にすることの外の何物でもない。或る事物を大衆化すとは、その事物を大衆 否寧ろかの多衆 にまで低めることなく、却つて大衆をこの事物の高度にまで組織することを意味しなければならない。何故なら、事物を大衆化するものは恰も大衆自身であつて、非大衆であつてはならなかつたのだから。大衆化の概念に於ては、従来の教育や啓蒙の概念は方向を転倒されねばならぬ。

かくの如きが大衆と大衆性との、又大衆化の、現実的な概念であるだろう。尤も、もし現実的ではなくして単に可能的な概念を求めるならば、恐らく夫は何とでも云えることである。併し何時も大事なことは、今茲で何が問題になつてゐるか、である。この問題が、そこに問題になつてゐる概念の形態 性格 を強制する。

吾々は科学の大衆性の問題に這入る。併しそのためには予め科学に二つの種類を区別しておくことが必要である。吾々は科学を日常的と非日常的とに区別しようと思う。蓋し前者に於ては日常的原理、日常性、が本来支配し、後者に於ては之が本来は支配しない、と考えられる理由があるから。⁽¹⁾

(1) 日常性)又は特定の意味に於ける常識性)に就いては、他の機会に述べようと思う。二つの科学の区別に就いては一応 K. Mannheim, Das Problem einer Soziologie des Wissens. (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, 1925, Bd. 53, S. 621-622) を見よ。なお拙著『科学方法論』参照。

二

科学の大衆性を口にする時、第一に思い起こされるのは恐らく、科学の通俗化であるだろう。どのような科学も、日常的科学であろうと非日常的科学であろうと、それ自身では決して通俗的ではあり得ない。何となれば、どのような科学もそれを科学的に確実な・明晰判明なものとしようとすれば、勢いその操作又は分析が実際には複雑となるのであり、従つて却つて外見上は、或る意味に於て難解となるのが普通だからである。科学的に好く判るようになるためには、却つて通俗的には把握し難くなるような犠牲を払わねばならないのが、多くの場合であるだろう。併しそれにも拘らず、一切の科学は通俗化され得る。と云うのは、その科学的操作又は分析を一々実地に表現する代りに、その出発点と帰着点とを、大体の道筋と共に、提供することは、必ず出来る筈に相違ない。科学者はここで、自己の採つた手続きが科学的であつたことをば、非科学者をしてまず信用せしめ、そうすることによって一まず、大体の予備観念を非科学者に与えようとする。だが之は取りも直さず予備観念であるのだから、この非科学者は、之を信用することから始めて、やがてみずから科学的手続きを実地に獲得する、という約束の下に置かれていく。通俗化とは実際、多数の非科学者を科学的ならしめるための概念であるだろう。通俗化に於て科学者と非科学

者とは、社会的に、教育者と被教育者との關係に置かれる、通俗化とは社会教育的な概念に外ならない（之は一つの教育的な啓蒙を意味する）。
それ故科学が通俗化される時、科学は決してそれ自身の原理 科学性 以外のもに服するのではない、ただそれ自身の原理をより高めようとする實際的な目的のためにのみ、それ自身を一応被教育者の水準にまで近づけるに過ぎない。科学が科学のための科学 アカデミーとは今の場合さし当り之である であることは、通俗化されることによつて少しも變るのではない。通俗化とは従つて、全くアカデミーの範囲内に属する概念である。で、もし通俗化が大衆化であるとしたなら、その時の大衆は全く、社会に於ける従順な生徒を意味することとなる。大衆のこのような云わば師範式概念は、吾々の意味する大衆ではなかつた。

(1) 通俗化意識はその皮肉として、一つの対蹠物を産むことが出来る。銜学が之である。銜学は一方、アカデミーへの押しつけがましい参与であると共に、他方、素人、威しを意味する。かくて威された素人が、今云つた誤られた 師範式 大衆概念である。

第二に思い及ぶものはジャーナリズムである。但し現在、科学のジャーナリズム化は、科学の報道化と科学の商品化とを意味している、後者は後の連関にゆずり、今は前者だけを問題としよう。通俗化が社会的に云つて教育者と被教育者との対立の上で行われたに對して、報道化は専門家と素人との対立の上で行われる。或る一つの科学部門に於て専門家である人も、他の科学部門に對しては素人である外はないから、茲では専門家だけが何かの科学者であるのではなくして、素人も亦一人の科学者であることが出来る。通俗化の場合に於ては、社会に於ける被教育者は全面的に低度の知識水準を有つわけであつたが、報道化に於ては、素人は或る部門に於てだけ水準が低いのであるから、一つの科学部門の専門家Aと素人Bとを、夫々その全面性に於て觀察すれば、一般に、AとBとは社会的に同格の知識水準を占める可能性があると考へねばならないわけである。それ故素人の社会に於ける総体は専門家の社会に於ける総体に對して、同程度の水準を持つものとして對立することが出来る。世間がアカデミーに對立する、素人は専門家に向つて、象牙の塔を出ることを忠告さえしようとする（だからこの素人はかの威された素人

ではないことを注意せよ。茲^{こゝ}では常識一般が専門一般に対して太刀打ちが出来ると考えられる（無論或る一つの部門に就いては常識は専門に対して太刀打出来ないが）。であるからジャーナリズムは無論アカデミー内部に行われるのではない、そうではなくして、アカデミーと世間との、専門と常識との、対立に於て初めて行われるのである。人間が素人としてもつ常識性は専門性 科学性 とは独立な独自の原理を意味しているのであり（今の場合の常識 常識一般 は決して単に科学前の未熟な知識を意味するのではない）、科学がそれ自身の原理の代りにこの原理によつて支配される時、それが科学の報道化となるのである。科学の報道化によつて科学は常識の在庫品として整理され、人々は一切の専門的知識へのこの在庫品を通じて連絡を保とうとする。かくて人々はその所謂常識を豊富にすることが出来るわけである（報道化はであるから、一つの啓蒙ではあるが、もはや教育的啓蒙ではない）。だが明らかにこの報道化は大衆化であることは出来ない。何となれば素人達の集団は専門家達の集団と対等であるとは云つても、之を優越する機能はない、素人達は専ら専門家達の与える材料を取捨選択は出来ても、専門家達の業績の科学的価値 真偽 に容嘴^{ようし}することは出来ないだろう、から。処が大衆は凡ゆる意味に於て優越なる、従つて科学的真理の判定に於ても亦優越なる、集団である筈であつた。素人は大衆ではない、報道化はであるから大衆化である理由がない。

第三。常識性の概念は吾々を、實際化の概念へ導いて行くかも知れない。科学的研究の主体として、もし人々がプラグマとしての事物を選ぶならば、それが科学の實際化ということである（^①之を實際生活に関する啓蒙と呼んでもよい）。前の報道化に於ては、科学の一定内容を取捨選択するものは常識の水準であるには相違なかつたが、併しなお科学は、それよりも先に、それとは関係なく、それ自身の内容を選択する権利を保留することが出来た。処が今度は、科学自身が行なう筈であつたこの内容選択までが、常識によつて代つて取り行なわれる場合なのである。従つてこの場合、常識はその限り専門を優越するかのようである。だがかかる實際化と雖も決して大衆化では

ない。科学はそれが實際化されると否とによって、科学的真理を変更すべき何の理由も有たないから。科学的真理の保持者は科学自身にあるのであって、科学の實際化にあるのではない。それ故、プラグマとしての実際の事物に対応する人間・實際家は、結局、理論家の業績の科学的価値に容喙する権利を持ち合わさない。實際家の集団は理論家の夫を優越し得ない。かかる實際家達はそれ故大衆ではない、實際化はであるから大衆化とは喰い違つた言葉である。

(1) 歴史的 日常的 事物を、歴史的に見ずして、単に実用主義的に見るならば、それがプラグマという概念である。

かくて科学の大衆化は、通俗化・報道化・實際化 要するに普及化 である理由が無かつた。併し之は寧ろ初めからそうありそうなことであつたのである。何故なら、大衆化とは階級化であつたのに、今まで挙げた様々な普及化は必ずしも階級との關係を示す必要はなかつたからであり、又、科学の大衆性が、科学概念を批判・変革する程、科学にとつて根本的なものである約束であつたのに、科学のかの普及化は、科学のもつ真理価値 科学のこの根本的なものへ何の変化をも影響しないのだから。普及化は超階級的啓蒙であり、超価値的啓蒙であつた。大衆化は然るに、そうではない。

科学の普及化 通俗化・報道化・實際化 は一切の科学に於て可能である。之に反して科学の大衆化は、原理的には、ただ日常的科学に於てのみ充分な意味で可能であり、ただそこに於てのみ重大な・根本的な・中心的な役割を持つことが出来るであろう。何故であるかは他の機会に譲ろう、今は仮にそうであると仮定しておく 前を見よ。科学の大衆化を語ろうとする吾々は、以下、特に日常的科学を頭に思い浮べて行かねばならぬ。

科学の大衆化を人々は、アカデミー化に対立させ勝ちである。科学のアカデミー化とは、事物が、選ばれたる一定の人々 之は無論どのような意味でも大衆ではない にさえ理解出来れば好いとして、そのためには難解をも辞しない、という態度であり、之に反して科学の大衆化とは、事物を大衆にとつても理解出来るように、平明・

そのような問題は元来どちらの問題でもないに相違ない。科学が事物を解決し得るか否かはどうでも好く、ただ人が何か一定の科学に従事する口実さえあれば好い。茲では事物が（科学的に）研究される代りに、ただ科学が（従つて当然非科学的に）研究される、のを見ることが出来る。それ故アカデミー的に真理であればある程、理論はその真価に於て却つて虚偽であることが出来る。何故なら、アカデミー化は問題の伝習化であり、従つて之をアカデミー以外のものに対照して云えば問題の高踏化に外ならず、それは要するに問題の主観化のことであるが、かくて問題がその客観性を失うことが、アカデミー化の虚偽であるのだから。アカデミー化が非難されるのは、その難解の故ではなくして、正にこの虚偽の故にである。難解はかかる虚偽の副作用の一つに過ぎない。

アカデミー化・問題の伝習化・を可能にする条件は併し、無論アカデミー自身の存在の内に横たわる。まずそこには講壇が存在し、そして之が科学を講壇化することが出来る（そこでは科学が講壇を決定するのでは必ずしもなく、逆に講壇が科学を決定するのだから）。即ち、講壇という社会的地位の特色が、科学的理論の構造の内に、反映され得るのである。講壇のその特色とは何か。アカデミー（講壇）は、その内部に於て社会的、社交的、であればある程、即ちその社会的位置を内部の交互作用によつて確保すればする程、益々超社会的となり、従つて益々この超社会性を意識化・良心化・合法化・する、之がその特色なのである。かくて学界は社会から独立化・孤立化して行かないわけには行かない。問題の高踏化・主観化はその結果であつた。アカデミー化の虚偽はであるから、アカデミーそのものの存在の不幸の内に横たわる。

かくてアカデミー化はアカデミーの或る超社会性 従つて又一、応の超階級性 の結果であつた。処で科学の大衆化は科学の或る意味での階級化であつた。その限り科学の大衆化とアカデミー化とは最も適切に対立するようである。併し、階級が対立物の概念である以上、一つの階級化は他の階級化とこそ正面から対立すべき筈である。その限り科学の大衆化とアカデミー化との対立は、側面からの・間接な・二次的な・対立でしかない。

科学の大衆化に正面から・直接に・一次的に・対立するものは寧ろ、科学のジャーナリズム化であるであらう。そして之が又實際、アカデミ化に対しても正面の対立物であった。但し茲で云うジャーナリズム化は前の機会に於てとは異つて、もはや科学の単なる報道化ではなく、報道の商品化を通じての、科学の商品化を意味するであらう。科学のジャーナリズム化が、科学の商品化であるなら、科学の価値がもはや真理でなくして利得となるという点の良し悪しは別としても、その利得すらがもはや大衆のものでないことは、注意されねばならない。のみならず、ジャーナリズムを産み又それから産れる処の、ジャーナリズムの顧客である公衆なるものが、元来大衆ではなかつた^①。實際、公衆　読者・読書界・聴衆・ファン・等々　は政治的な組織性を有つものではない、組織性を有たないものは大衆ではなかつた。ジャーナリズムは往々想像される処とは異つて、であるから決して大衆のものではないのである。科学のジャーナリズム化は實際、その顧客である公衆なるものの性質を通じて、或る範圍或る時期の内では、大衆の組織化に与らないのではないが、一旦この限界に到着すると、この公衆の同じ性質を通じて、却つて實質上は大衆の組織化を解体し、従つて間接にまたは直接に、非大衆　反大衆　の組織化に与る、そういう機能を有ちはしないか（今日代表的と考えられる大新聞や評論雑誌を見るが好い）。商品としての科学の顧客である公衆が、大衆を非大衆にまで裏切ることの出来る性質を、元来持つからである。さて科学のジャーナリズム化がそういう一定の機能を営み出す時、そこに見出されるものは、大衆並びに非大衆の側に於ける科学の俗流化であるであらう。俗流化という言葉は直ちに反価値を云い現わしている言葉であるが、その反価値とは、ジャーナリストイックな公衆を媒介として、大衆を大衆となす代りに之を非大衆にまで非大衆化し、かくして大衆を裏切る処の、一つの虚偽を指す名であるであらう。科学のジャーナリズム化が商品化である限り、夫は科学の非大衆化にまで必然的に転化し得る性質を有っている。ジャーナリズム化　商品化　こそ科学大衆化の正反对物に外ならない。

(1) 公衆に就いてはタルドの前掲書を見よ。

科学の大衆性の正反对物が、人々の想像する処とは異つて、アカデミー　高踏化　であるよりも、寧ろジャーナリズム　俗流化　であることは、實際問題として特に注目に値する。

科学の高踏化とその俗流化とは、科学の大衆化の名に於て批判されるべき、二つの虚偽である。^①夫を吾々は今まで見た。科学の大衆化という、この階級的啓蒙は、この二つの虚偽を　インテリゲンチヤと有産者とに対して批判することを以て、始めねばならぬ。そうした後になつて初めて、科学大衆化の積極的任務が具体的な形で課せられ得るのである。さて今までの吾々はこの前半を取り扱つた、科学の大衆化が何で無いかを。次に後半を、科学の大衆化が何であるかを、改めて見よう。

(1) 科学の通俗化・報道化・實際化・は之に反して虚偽ではなかつた。之等のものはそして、没階級的啓蒙であつたことを注意せよ。

大衆性とは、大衆化とは、事物が単に普及されることではなくして、大衆がその事物の水準の高さにまで組織化されることであつた。従つて科学の大衆性とは、科学を大衆化すとは、大衆がその科学を把握し得るような水準にまで組織化されることである筈であつた。科学が大衆にまで降りて来ることはなくて、大衆が科学にまで昇つて行くことが、科学の大衆化なのである。それ故科学の大衆性とは実は大衆の科学性でなければならぬ。この点は根本的に重大である。この意味を説明しよう。

科学は云つまでもなく科学するものの存在を離れては存在しない、であるから、科学は科学するものの存在を離れて考へられてはならない。今科学の大衆性という問題に就いてはそれ故、單純に科学をまず第一に語るべきではなくして、科学する大衆をまず最初に語る必要が生じて来る。科学があつて科学の大衆性が問題になるのではなくして、大衆があつて科学の大衆性が問題となるのである。科学せんとする大衆がまず存在して、その上で科学の大衆化が必要となつて来るのである(もしそうでなければこの問題それ自身が大衆性を持たないであらう)。である

から云うことが出来る、「科学の大衆性」の問題は実は、「大衆の科学性」の問題である、と。大衆自身が科学を必要とする時初めて、科学は大衆化され得る、という平凡な事実が之である。

併し大衆自身が科学を必要とする時は、大衆が一定の政治的意識を有つ時である、何故なら、科学は吾々は日常的（歴史的・政治的）科学を頭に置く約束であつた（前を見よ） 政治的意識によって初めて一定の方向に向つて必然にされると考えられるから、である。今日大衆を科学にまで驅る動機は、かの名高い驚異の念ではなくて、正に政治的要求であるだろう。そして大衆が一定の政治的意識を有つ時は已に、大衆が一定の政治的組織化を

意識的に又は自然發生的に 蒙つた時なのである。それ故大衆の科学性とは、大衆の社会的・政治的・組織化によつて必然にされたその観念的反映の外の何物でもない。従つて又科学の大衆性は、大衆の政治的組織化、それは必ずしも意識的・観念的ではない の上に立つて初めて可能なのである。重ねて云おう、科学の大衆性は、大衆の政治的組織化の観念的反映である。

併しながら、科学のもつ大衆性それ自身が又直接に、大衆の何等かの組織化である筈であつた。科学のこの大衆組織化は、今云つた政治的組織とは直ちに一つではない、前者は後者の観念的反映であつたから。だがそれにも拘らず、科学のこの大衆組織化は矢張り政治的、性格を失つものではない。なぜなら、之は観念形態を通じての組織化であり、従つて観念形態が一つの政治的役割 それは云わば観念的な役割である を持つ限り、之は再び大衆の政治的組織化に 意識的に 与らないわけにはいかない、から。科学は云わば観念的に大衆を組織化する（そ

してかかる観念的組織化は政治的組織化に欠くことが出来ず又その重大な一部分でさえもある）。さて科学がこのよつな 大衆の観念的組織化という 機能を有つ時、それが、科学の大衆性の第二の規定となる。もし或る科学が、大衆の半ば無自覚・無媒介に持つ意識をば解明し、之に科学的（理論的）根本性を与え、そうすることによつてこの意識をば夫が向わねばならずにいた一定の焦点へ志向・集中せしめ、それと同時に、この焦点を尖端

として逆にこの意識内容一切を理論にまで整理するならば、その科学こそは大衆性 第二の規定としての 有つのである。未組織諸觀念を理論にまで合目的に整理することが、科学の今の大衆性であるだろう。かくして大衆の大衆的 階級的 意識水準は高度となり、それが又逐次に夫に相当する理論水準にまで翻訳される。^①

(1) 科学の大衆性が大衆の觀念的組織化であればこそ、大衆化が大衆の前衛にまで及ぶ時、そこに例えは指導原理が、科学的に而も大衆的に、樹立されることも出来る。もし大衆性が科学の普及化などであるならば、凡そ指導原理なるものはそれが大衆的であるだけ、却つて科学的でなくなる筈である。

第三に、大衆を組織化するものは大衆みずからであつた、大衆を組織化するものは非大衆ではなかつた。従つて科学の大衆性を保証する者も亦大衆みずからでしかない。それ故に又実際に科学の大衆性を保証するためには、科学の研究方法、それ自身が大衆的、組織化的、でなければならぬわけである。というのは、研究の内部的な手続きが体系化でなければならぬというのではない(夫は云うまでもなく必要である)、研究者自身が相互に 政治的に 組織化されざるを得ないと云うのである。^① この第三の規定は、科学大衆性の第一・第二の規定から来る至極当然な結果に過ぎない。

(1) 座談会・讀書会・研究会・研究所・等々が、大衆的科学的科学自身の性質から云つて必然である所以は、茲にある。所謂教育、それは現在科学、と何等關係がないのにも拘らず常にそれと混同されている とは如何に異つた範疇に之が属するかを見よ。

ここまで来ると人々は、科学の大衆化するものが科学の政治的性格に帰着することを、もはや見逃さないであろうと思う。処が科学の政治性こそ科学の優越なる実践性なのである。それ故、科学の大衆性とは科学 理論 の実践性に帰着する処のものの謂であつた。

科学の大衆化が科学の政治的規定であるから、正にそれであるからこそ又、夫は科学の論理的規定でなくてはならぬ。蓋し日常生活 吾々は今之を頭に置く約束であつた に於ける論理・日常性の論理は、それ自身政治的

性、格を有つと考えられるからである。例えば弁証法的論理　之は日常的論理である　の特色は、それが自己独立的な論理としては存在を包み切ることが出来ず、従つて存在を支配し切れない、処にあり、そこでは却つて存在が論理の構造　真偽関係　を決定しなければならぬのである。処がこの存在が歴史社会的・即ち又政治的・存在である限り、論理はその構造自身の内に、存在の政治的条件を反映せざるを得ないであろう。科学の大衆化はそれ故、科学が真理であるか虚偽であるかの価値に関わる。科学が大衆性を持つか持たないかは、科学の外から科学に付加されたどうでも好い条件ではなくして、科学そのものの根本的な本質的な条件をなす。そのことを吾々は実は最初から云つておいた。処が又吾々は已に、科学の云わば超、大衆性（アカデミーがその代表物）と非、大衆化（俗流化がその代表物）が大衆化によつて批判さるべき二つの虚偽であることを見てある。科学の大衆化とはであるから、科学の真理性の一つの名でなければならなかつた。日常的科学は今日、大衆性を持つことによつて、初めて、真理となることが出来る。

(1) この点を明白にするために私は「論理の政治的性格」を書いた。

それであるから最後に、科学の大衆性は、論理の階級性の一つの名に外ならない^①。そして論理の階級性は、科学の階級性の最も優越な顕著な場合であるだろう。科学の大衆性とは、かくて科学の階級性の一つの実質であつた。

(1) 階級的論理という概念を吾々はヨゼフ・ディーンツェンに負つ。恐らく之に對して、「階級の論理」という言葉を無意味だとするものはマックス・シェーラーである(Die Wissensformen und die Gesellschaft)。彼によれば階級的科學という問題は　論理の問題ではなくして　「社会的な偶像論」に属すべきものである。

(2) 科学階級性の問題は、科学の歴史的發展に於ける階級性の問題と、科学の理論内容の論理に関する階級性の問題との、総合でなければならぬ。問題を前者だけに限れば論理上の非合法主義であり、後者だけに限れば論理上の合法主義となる。併し本来の問題は、前者が如何に後者となつて現われるか、両者が如何に媒介されるかにあるであらう。

-
- 『戸坂潤全集』第二卷（勁草書房、一九六六（昭和四一）年）所収。
 - 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
 - PDF化には $\text{\LaTeX}2_{\epsilon}$ でタイプセットを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。